

浜松市における創造都市形成への取組

著者名(日)	片山 泰輔, 小岩 信治, 立入 正之, 高山 靖子, 的場 ひろし, 山森 達也
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	11
ページ	109-116
発行年	2011-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000051/

浜松市における創造都市形成への取組

片山泰輔
小立岩信治
高的入正靖之
的山場靖ひろ
森達也

浜松市における創造都市形成への取組

Industry, academia and government cooperation for a "creative city" in Hamamatsu City

片山 泰輔

文化政策学部芸術文化学科

Taisuke KATAYAMA

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management.

小岩 信治

文化政策学部芸術文化学科

Shinji KOIWA

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management.

立入 正之

文化政策学部芸術文化学科

Masayuki TACHIIRI

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management.

高山 靖子

デザイン学部生産造形学科

Yasuko TAKAYAMA

Department of Industrial Design, Faculty of Design

的場ひろし

デザイン学部メディア造形学科

Hiroshi MATOBA

Department of Art and Science, Faculty of Design

山森 達也

元 浜松創造都市協議会

Tatsuya YAMAMORI

浜松市は日本有数の工業都市として発展してきたが、産業構造の転換期を迎え、大きな岐路に立たされている。こうした中、浜松市は、2009年3月に創造都市を目指す浜松市文化振興ビジョンを策定した。ここでは、文化創造を基盤とした創造的産業による持続的な都市の成長が目指されている。これを受けて、静岡文化芸術大学の研究プロジェクトチームは、浜松市、浜松商工会議所、浜松市文化振興財団の3者に呼びかけ、浜松創造都市協議会を設立した。浜松市は楽器産業の集積はあるが、音楽をはじめとした文化産業の集積がなく、雇用と所得をもたらす文化産業の振興が急務である。浜松創造都市協議会では、創造的人材が日常的に交流し、浜松発の創造的活動が産業として自立するための支援活動を開始したところである。

Hamamatsu City has enjoyed economic growth and prosperity for many decades thanks to competitive manufacturing industries. However, this city is confronted with momentous changes in its industrial structure. Under the strained economic conditions, Hamamatsu City settled on a comprehensive plan of cultural policy in March 2009. This plan emphasizes transformation into a "creative city" in which the creative industry with cultural capital drives sustainable growth. Therefore, our research project team established the Association for Creative City Hamamatsu in July 2009, a pioneering collaboration with the Hamamatsu Chamber of Commerce and Industry, Hamamatsu Cultural Foundation, and Hamamatsu City Government. Despite the presence of a cluster of musical instrument manufacturers, the cultural industry including the music industry, is underdeveloped in Hamamatsu City. Thus the growth of for-profit and non-profit arts and cultural industries, which generate jobs and income, is very important. We have recently initiated strategic projects to network with creative people and nurture the arts and cultural industry in Hamamatsu City.

1. はじめに

静岡県浜松市は2005年7月の12市町村の大合併により、人口80万人を突破し、2007年4月に新潟市とともに政令指定都市となった。楽器、オートバイ、自動車等を中心とした製造業の町として発展してきた浜松市は、2008年(平成20年)工業統計における製造品出荷額では政令指定都市(東京都区部を含む)中第8位、粗付加価値額では同第7位、従業者数及び現金給与総額では同第5位の地位にある(表1)。市内産業に占める規模としては自動車産業が圧倒的であるが、ヤマハ、カワイ、ローランド等、世界の主要楽器メーカーが本社を置いており、楽器産業の分野においては世界の中心地となっている。

こうした中、浜松市では「楽器のまち」から、「音楽のまち」へ転換すべく、長年にわたって文化振興に力を注いできた。行政計画としては、1981年の第二次総合計画において初めて「音楽のまちづくり」が掲げられ、様々

な事業が展開されてきているが、中でも1991年度から3年ごとに開催されている浜松国際ピアノコンクールは浜松市の代表的なイベントと言える。さらに、1996年度からは、静岡県との共催で静岡国際オペラコンクールも3年ごとに開催されており、浜松市は国際音楽コンクール世界連盟(World Federation of International Music Competitions)加盟の2つのコンクールが開催される国内唯一の都市ともなっている。

表1 政令指定都市の製造業ランキング

製造品出荷額等 (万円)		粗付加価値額 (万円)		現金給与総額 (万円)		従業者数 (人)		
1	東京特別区	465,226,138	1	東京特別区	203,791,649	1	東京特別区	216,436
2	川崎市	461,104,350	2	大阪市	196,747,770	2	大阪市	147,198
3	大阪市	458,905,558	3	川崎市	147,409,150	3	横浜市	59,221,212
4	名古屋市	412,080,215	4	横浜市	144,923,302	4	名古屋市	53,983,331
5	横浜市	390,331,138	5	名古屋市	138,258,673	5	浜松市	41,080,495
6	堺市	330,098,752	6	神戸市	119,115,916	6	神戸市	36,747,440
7	神戸市	309,633,143	7	浜松市	100,366,588	7	川崎市	34,164,585
8	浜松市	286,934,985	8	京都市	100,296,657	8	京都市	32,921,543
9	広島市	253,409,532	9	堺市	95,198,358	9	北九州市	28,118,449
10	北九州市	246,093,029	10	北九州市	86,103,218	10	堺市	25,102,420
11	京都市	244,883,086	11	広島市	81,797,406	11	広島市	24,862,917
12	静岡市	184,517,027	12	静岡市	72,840,757	12	静岡市	21,789,608
13	千葉市	135,622,841	13	千葉市	41,677,588	13	新潟市	14,652,070
14	新潟市	111,675,127	14	新潟市	41,220,744	14	さいたま市	12,793,844
15	さいたま市	91,317,208	15	さいたま市	38,734,905	15	千葉市	11,862,937
16	福岡市	64,454,191	16	福岡市	21,437,572	16	札幌市	9,333,340
17	仙台市	57,454,828	17	札幌市	20,752,653	17	福岡市	7,983,784
18	札幌市	51,624,537	18	仙台市	20,053,135	18	仙台市	7,610,163

(資料) 経済産業省「平成20年工業統計調査」

2. 「浜松市文化振興ビジョン」 (2009年3月)

2007年の政令指定都市移行直後の選挙で現職を破って就任した鈴木康友市長は、就任後まもなく、これまでの「音楽のまち」を「音楽の都」にグレードアップするとともに、創造都市を目指すことを公言した。こうした中、政令指定都市としての新しい浜松市にふさわしい文化振興ビジョンの改定が行なわれることになった。筆者の1人はこの策定委員会の委員長を務めたことから、以後、浜松市における創造都市づくりに深く関わることになった。なお、旧浜松市として最初の「文化振興ビジョン」は2000年度(平成12年度)に策定されている。

浜松市では、前述の「音楽のまちづくり」の文化振興策により、アクトシティ浜松等の文化施設においては様々な公演が行われ、鑑賞機会の充実がはかられてきた。表2は2009年(平成21年)の「家計調査」における都市別の世帯あたり年間支出額における「映画・演劇等入場料」の金額を比較したものである。映画、演劇、クラシック音楽のコンサート、ポピュラー音楽のコンサート等がすべて含まれているデータではあるが、大雑把な傾向はつかめよう。浜松市は比較対象の51都市中19位、先の工業統計と共通の政令指定都市のみに限れば18市の中で14位であるが、6335円という値は、全国平均(6628円)を若干下回る水準である。しかしながら、京都市や名古屋市を上回る水準にあることを考えれば、ますます健闘していると言えよう。

また、吹奏楽、オーケストラ、合唱から、ジャズをはじめとしたポピュラー音楽まで、市民による文化活動も活発に行われている。アマチュア音楽活動の支援では、浜松青年会議所による市民楽団(浜松交響楽団)への支援が企業メセナ協議会のメセナ大賞(2001まちづくり賞)を受賞するといった成果もある。さらに、近年では、市民が主体となった「やらまいかミュージックフェスティバル」が行なわれるなど、行政依存の文化振興から脱却しようという動きも見られる。

このように、鑑賞面や市民文化活動の面ではそれなりの成果をあげてきた浜松市の音楽文化振興であるが、創造都市を目指すという観点からは、実は重要な部分が欠落している点を指摘せざるをえない。創造都市を牽引するのは創造的産業であるが、浜松市には楽器産業の集積はあっても、音楽産業の集積はみられない。先にみた工業生産における地位とは対照的に、年間を通じて給与支払いを行なう常設のプロの音楽団体は存在せず、アクトシティ浜松等で行なわれる音楽公演についても自主制作よりもいわゆる「パッケージ買い」が多い。滋賀県のびわ湖ホールが財政的制約に苦しみつつも、毎年、自主制作のオペラを発信しているのと比べても対照的である。2つの国際コンクールについても、ホスト役になるべく音楽コミュニティが市内にあるわけではなく、音楽面の専門的な委員等は市外・国外の人材に依存している状態である。一方、市内には民間のライブハウス等もあり、賑わいをみせてはいるが、ポピュラー

音楽の分野でもプロのアーティストが浜松を拠点に置いて活発に活躍しているという状況にはほど遠い。

表2 世帯あたりの「映画・演劇等入場料支出」の都市別ランキング

順位	政令指定都市内順位	都市名	世帯あたり年間支出額(円) (平成21年)
1	1	新潟市	12,889
2	2	川崎市	11,677
3	3	東京都区部	11,523
4	4	福岡市	9,979
5	5	神戸市	9,006
6	6	さいたま市	8,588
7	7	広島市	8,466
8		大津市	8,268
9	8	横浜市	7,816
10	9	大阪市	7,789
11	10	静岡市	7,713
12		奈良市	7,168
13	11	千葉市	6,879
14		金沢市	6,832
15		宇都宮市	6,800
16	12	仙台市	6,744
17		秋田市	6,438
18	13	札幌市	6,387
19	14	浜松市	6,335
20		岐阜市	6,292
21		富山市	5,752
22		長崎市	5,716
23		長野市	5,595
24	15	北九州市	5,543
25		盛岡市	5,385
26		水戸市	5,356
27		鹿児島市	5,349
28		高知市	5,138
29		前橋市	5,118
30		熊本市	5,101
31		佐賀市	4,982
32		津市	4,895
33		福島市	4,864
34	16	名古屋市	4,824
35	17	岡山市	4,821
36		那覇市	4,612
37		甲府市	4,426
38		福井市	4,424
39	18	京都市	4,206
40		和歌山市	4,052
41		大分市	3,901

42		山口市	3,770
43	19	堺市	3,748
44		徳島市	3,618
45		高松市	3,434
46		山形市	3,236
47		松山市	3,162
48		宮崎市	3,053
49		鳥取市	2,971
50		松江市	2,791
51		青森市	2,634
		全国平均	6,628

(資料) 総務省統計局「平成21年家計調査」

表3は、2005年度(平成17年度)国勢調査における職業別人口において、従業者1万人あたりに占める芸術家の人数を政令都市間で比較したものである。文芸家・著述家、記者・編集者、彫刻家・画家・工芸美術家、デザイナー、写真家、音楽家、俳優・舞踊家・演芸家の総数として示される「芸術家合計」をみると、浜松市は政令指定都市中最下位となっている。首位の東京都区部との差は5倍以上であるが、同時期に政令指定都市になった新潟市や同じ県内の静岡市と比べてもかなりの差がついている。これを音楽家のみにしぼってみると、多少ランクは上昇し、堺市、静岡市、北九州市を押さえ、浜松市は大阪市とほぼ同率の15位となる。国勢調査では音楽家については、主にレッスンを中心に生計をたてているのか、それとも演奏活動中心で生計をたてているのかに分けて集計が行なわれている。演奏活動中心の音楽家についてみると順位は15位で変わらないものの、スコアはむしろ下位グループに近い。一方、教授中心のレッスンプロのほうをみると、ランクは11位に上昇し、そのスコアは名古屋を上回り、東京都区部に迫る位置にある。つまり、浜松市の音楽家の中心はレッスンプロであることがわかる。これは、楽器メーカーが積極的に展開してきた音楽教室と大きな関係があるものと推察される。

他都市の状況で注目されるのは、浜松同様、「音楽のまち」を掲げて政策推進を行なってきた川崎市が音楽家合計及び音楽家(演奏中心)において東京都区部に次ぐ位置にランキングされていることである。

表3 就業者1万人あたりの芸術家数

芸術家 (計)		うち音楽家 (計)					
				音楽家 (演奏中心)	音楽家 (レッスンプロ)		
	(人)		(人)	(人)	(人)		
1 東京都区部	317	1 東京都区部	32.6	1 東京都区部	17.9	1 広島市	21.0
2 川崎市	202	2 川崎市	25.4	2 川崎市	12.2	2 仙台市	20.7
3 横浜市	150	3 広島市	24.7	3 横浜市	8.3	3 神戸市	20.0
4 京都市	149	4 横浜市	24.5	4 大阪市	6.6	4 新潟市	19.2
5 大阪市	133	5 神戸市	24.5	5 京都市	6.3	5 福岡市	18.8
6 福岡市	128	6 仙台市	24.0	6 札幌市	4.9	6 札幌市	17.5
7 さいたま市	125	7 京都市	23.1	7 名古屋市	4.7	7 千葉市	16.8
8 千葉市	114	8 札幌市	22.4	8 神戸市	4.5	8 京都市	16.8
9 名古屋市	110	9 福岡市	21.9	9 堺市	4.3	9 横浜市	16.2
10 札幌市	109	10 新潟市	20.7	10 さいたま市	4.3	10 東京都区部	14.7
11 神戸市	109	11 千葉市	20.3	11 広島市	3.7	11 浜松市	14.5
12 広島市	98	12 名古屋市	19.0	12 千葉市	3.5	12 名古屋市	14.3
13 仙台市	93	13 さいたま市	17.4	13 仙台市	3.3	13 川崎市	13.2
14 新潟市	83	14 大阪市	16.94	14 福岡市	3.1	14 さいたま市	13.1
15 静岡市	80	15 浜松市	16.85	15 浜松市	2.3	15 北九州市	11.3
16 堺市	65	16 堺市	13.9	16 静岡市	2.2	16 静岡市	11.2
17 北九州市	63	17 静岡市	13.4	17 新潟市	1.6	17 大阪市	10.4
18 浜松市	59	18 北九州市	12.7	18 北九州市	1.4	18 堺市	9.6

(資料) 総務省統計局「平成17年国勢調査」

このように、華やかな音楽鑑賞機会と市民の活発なアマチュア音楽活動の一方で、浜松自らが創造し発信する音楽文化という点では、その基盤はまだまだ脆弱な状態にある。きわめて乱暴な言い方をすれば、浜松の音楽文化は、物づくりで稼いだお金で、(他所から)買ってきて消費する音楽文化、だったのである。

これまでではの浜松市においては、自動車をはじめとする製造業が多く富をもたらし、豊かな財政によって、国内外の著名なアーティストを浜松に招聘して市民はそれを享受することができた。しかし産業構造が転換する中、このような繁栄モデルが長くは続かないことが次第に明らかになってきている。そこに登場したのが今回の創造都市・浜松というビジョンなのである。

浜松市に限ったことではないが、わが国の自治体文化政策は、長年にわたって文部科学省・文化庁が所管してきたこともあり、芸術や文化は教養、余暇、娯楽であり、豊かな消費生活を実現するためのものとしての視点から捉えられることが多かった。そこには、芸術を創造する活動が重要な産業活動であるという視点が欠落しがちであった。これに対し、今回の「浜松市文化振興ビジョン」では、芸術をはじめとした文化創造を営利及び非営利の産業面からも捉え、都市が持続的成長をしていく循環構造の中に文化を内生的に組み込むかたちへの転換を試みたのである。

芸術を産業面から捉えるということは、プロの芸術団体や音楽ビジネス等に注目するということにとどまらない。

従来のモノづくり産業の付加価値を高めるための刺激を与えることも芸術や文化の重要な役割である。これまで、安くて品質の良いモノを生産することで発展してきた浜松の製造業であるが、これからの時代は、工場における生産性の高さではなく、製品の付加価値を高めていくことが求められている。デザイン性に富み、ライフスタイルを提案できるような商品が求められることになる。そして、そのような商品を企画し、デザインできる人材はまさに創造的人材であるが、彼らは常に芸術的な刺激を必要とする。多くの世界的企業が本社を置く浜松の文化的環境が、こうした創造的人材にとって刺激的なものであることが浜松の製造業の発展のためにも不可欠となってきているのである。

「浜松市文化振興ビジョン」では、音楽をはじめとした芸術の意義を、これまでのような市民の鑑賞機会やアマチュア活動の充実による豊かさの実現に加え、創造的な仕事を人々にとって不可欠な創造的な刺激としての芸術的環境という点にまで広げて捉えることになったのである。

ここ再び、国勢調査のデータをみてみよう。モノづくりの付加価値を高めるうえで重要な役割を果たすデザイナー人口の比率を比較してみると、浜松市は18都市中17位という位置にある(表4)。音楽家の比率では浜松市を下回っていた工業都市・堺は、デザインにおいては浜松を大きく上回り、12位にランクされ、同じ県内の静岡市にも水をあけられている。ちなみにユネスコのクリエイティブ・シティーズ・ネットワークのデザイン部門に認められた名古屋

屋市と神戸市はそれぞれ7位、8位という位置にある。

創造的産業には、営利のビジネスだけでなく、非営利の芸術団体、さらには、様々な社会問題を解決する社会的起業家の活動も含まれる。浜松市は、合併により日本で2番目に広い面積を持つ都市となったことに加え、わが国最大のブラジル人コミュニティを持つなど、地理的、文化的に最も多様性に富んだ政令指定都市である。こうした中、社会的起業家による社会的包摂のための様々な取り組みが求められるが、これらも重要な創造的産業である。

このように「浜松市文化振興ビジョン」は、文化を豊かな「消費」生活としてだけでなく営利・非営利の様々な創造的産業発展に向けた資本蓄積のための「投資」として捉える見方を提供しようとしたものである。浜松市にとってみれば、これまで製造業で行なってきたことを、芸術や文化という別の分野で行うだけなのだが、「芸術や文化は余暇時間のもので、仕事とは別のもの」という意識は行政のみならず、市民の中にも根深く、これらを払拭するためには多くの時間と労力がかかるものと考えられる。

3. 創造拠点形成に向けての取組み

(1) 浜松創造都市協議会の設立

「浜松市文化振興ビジョン」では、創造的産業の発展を促すために、創造的人材が集まる創造拠点の形成が重要である点を強調している。そして、そのビジョン実現のための推進体制としては、行政だけがそれを担うのではなく、産業界や大学、市民活動をはじめとした民間主体が積極的な役割を果たすものとされた。行政によって給付される福祉的サービスとしての文化ではなく、産業として持続性のある文化創造を目指すのであるから、当然のこととも言える。

そこで、筆者らはビジョン策定の翌年度にあたる2009年度より、静岡文化芸術大学の学内の競争的資金である「学長特別研究費」を用いて、「浜松市における創造拠点形成のための社会実験」という研究プロジェクトを立ち上げ、産官学（浜松商工会議所、浜松市、浜松市文化振興財団）連携により、浜松創造都市協議会という推進組織を設立した(2009年7月)。

静岡文化芸術大学は2000年に静岡県、浜松市、及び浜松市の経済界の協力によって公設民営大学として設立された大学であり(2010年度より静岡県設置の公立大学法人となった)、デザイン学部とともに、日本で唯一の文化政策学部を持つ。芸術家の養成は行っていないが、芸術学やアートマネジメント、文化政策の分野では、わが国でも最大規模の集積を誇っており、日本文化政策学会、日本アートマネジメント学会関東部会の本部が置かれている。

経済界においては、浜松商工会議所の文化振興特別委員会の活動が活発化しつつある時期とも重なり、産官学の連携はスムーズに進展した。

(2) 創造拠点としての大学街

静岡文化芸術大学は、浜松駅の北東に広がる、1990年代以降に区画整理が進んだ「東地区」と呼ばれるエリアの一番北東の端に立地されている。大学の周辺地域に目を向けると、大学の南側、徒歩約10分のアクトシティの文化施設群の中には、世界的なコレクションを持つ浜松市楽

表4 就業者1万人あたりのデザイナー数

		(人)
1	東京都区部	95.9
2	川崎市	63.8
3	大阪市	56.4
4	京都市	55.5
5	横浜市	47.2
6	福岡市	43.6
7	名古屋市	41.0
8	神戸市	39.8
9	さいたま市	36.2
10	札幌市	32.3
11	千葉市	29.4
12	堺市	27.9
13	広島市	27.8
14	静岡市	26.0
15	仙台市	25.1
16	新潟市	19.2
17	浜松市	19.2
18	北九州市	16.6

(資料) 総務省統計局「平成17年国勢調査」

器博物館(1995年開館)がある。浜松市楽器博物館の特徴は、収蔵楽器の多くが高度な技術によってメンテナンスされ、現在も演奏可能な状態になっていることである。このことは大学におけるアカデミックな音楽史研究のみならず、現代の楽器産業における最先端の楽器開発においても貴重な資料となっている。実際、ローランド社の最先端の電子楽器である電子チェンバロの中には、浜松市楽器博物館が所蔵する歴史的チェンバロから音源をサンプリングしているものもみられる。

さらに、楽器博物館と浜松駅の間には、アクトシティのホール及びコンベンション施設群が広がっている。確かに、4面舞台を持つ大ホールをはじめとした高度な設備が十分に活かされ、オリジナリティのある創造的な発信ができていくかという点では、不十分なところも多いかもしれない。しかし、先述の2つの国際コンクールもこれらの施設を会場として行なわれており、浜松において優れた芸術文化が紹介される中心地であることは間違いない。

この社会実験プロジェクトは、このような施設が立地する、大学からアクトシティにかけての地域を、芸術家、デザイナー、研究者、起業家、経営者、NPOリーダー等の創造的人材が日常的に集まり、交流できる拠点となるように様々な取り組みを行なうことを目指している。このような交流が活発になることで、様々な創造的産業が生まれ出ることが期待されるからである。しかしながら、現状は、アクトシティが出来て15年、静岡文化芸術大学が出来て10年が過ぎようとしているが、文化・学術エリアとしての賑わいが生まれているとは言い難い状況がある。飲食店や書店等の集積はみられず、日が暮れると女性が一人歩きするのも躊躇されるほど閑散としてしまう。カリフォルニア州のバークレーやマサチューセッツ州ケンブリッジ等に見られるように、大学街がクリエイティブな人々をひきつ

けるには、いわゆる繁華街のネオンや喧騒は不要だが、夜中まで人通りが耐えない、上質な賑わいがつくられることが必要である。むしろ、近年は分譲型のマンションが盛んに建設されており、閑静な住宅街といった雰囲気する漂い始めている。住宅が建設され、人々がそこに住むことは重要であるが、それはあくまで、文化・学術エリアとしての上質な賑わいを求めての定住である必要がある。

ここで、再度、国勢調査のデータをみてみよう。表5は、国勢調査の職業分類として使われている日本標準職業分類における「専門的・技術的職業従事者」の比率を都市間で比較したものである。ここには、文系・理系の研究者、様々な産業分野の技術者、システムエンジニア、医師をはじめとした保健医療従事者、裁判官、弁護士をはじめとした法務従事者、公認会計士、税理士をはじめとする経営専門職業従事者、幼稚園から大学までの教員、そして、先にみた芸術家や、職業スポーツ従事者等が含まれる。浜松市は18都府市中最下位に位置づけられている。芸術家のみならず、専門的・技術的職業従事者の比率という点でも浜松市は他都市に遅れをとっているのである。国勢調査における「専門的・技術的職業従事者」と創造的人材が完全一致するわけではないが、両者にはかなりの相関がある。大学を中心に創造的人材が集まる創造拠点形成に取り組もうとする意図は、こうした状況を少しでも変えていこうという思いからくるものである。

リチャード・フロリダは、クリエイティブシティの中心としての大学の役割を強調しているが、同時に、それが大学単独で行なえるものでないことも指摘している。「周辺のコミュニティには、大学の生み出すイノベーションと技術を吸収し発展させる能力を持ち、クリエイティブ・クラスが求める幅の広いライフスタイルに合わせた快適な生活空間と場所の質を提供することが求められている」

(リチャード・フロリダ『クリエイティブ資本論』邦訳書 p.367) と述べている。研究・教育機関としての大学が、楽器博物館をはじめとする地域の文化施設と連携することで創造的人材が集まる拠点の形成を図っていくことが重要なのである。

(3) 「浜松創造カフェ」

浜松創造都市協議会が創造拠点形成のための事業として取り組んできた最も中核的な事業は「浜松創造カフェ」である。これは、コンサートやシンポジウム等の開催後に、演奏者や登壇者、来場者、会場スタッフ等がカクテルや軽食を楽しみながら交流するための場を提供しているものであり、常設の飲食店としてのカフェを経営するところまでは至っていない。創造都市を目指す国内他都市においても、自治体やNPO団体が中心となって「クリエイティブ・カフェ」と呼ばれる活動が行われているが、これは研究者やアーティスト、デザイナーをゲストに呼び、クリエイティブ・クラスを対象としたセミナーと、交流を目的としたカフェタイムがセットになったものが多い。浜松創造都市協議会で行っている「浜松創造カフェ」は、それぞれのコンサートやシンポジウム後の交流の場として実施しているところが特徴的である。これは、アクトシティの文化施設と

大学に囲まれたエリアを芸術的でアカデミックな賑わいのあるエリアとして拠点化していきたいという、「場」に関する前述の戦略とも関係している。

表5 就業者1万人あたりの専門的・技術的職業従事者

		(人)
1	川崎市	1,817
2	横浜市	1,792
3	神戸市	1,672
4	東京都区部	1,668
5	千葉市	1,630
6	福岡市	1,567
7	仙台市	1,565
8	京都市	1,565
9	さいたま市	1,531
10	広島市	1,517
11	札幌市	1,513
12	北九州市	1,476
13	堺市	1,410
14	名古屋市	1,394
15	新潟市	1,365
16	大阪市	1,283
17	静岡市	1,225
18	浜松市	1,224

(資料) 総務省統計局「平成17年国勢調査」

2009年度の開催実績は9回、そのうちシンポジウム等の学術的イベントの後に開催したのが4回、コンサートや展覧会等の芸術イベントの後に開催したのが4回、イベント等に付随せず独立して行ったのが1回となっている。シンポジウム後に開催したカフェと、コンサート後に行ったカフェとでは来場者の傾向が異なり、シンポジウム後の開催のものには研究者や市内企業役員、行政職員が多く見られ、コンサート後の開催のものでは演奏者のファン、音楽好きの市民等が多い。各回の参加者は20名から50名程度であり、芸術鑑賞や学術イベントで刺激を受けた人々が、専門分野や芸術文化について議論をするための規模としては概ね適正な人数と言える。

カフェの場では、それまでつながりのなかった者同士の名刺交換、学生やアーティストが専門家を囲む形での議論、専門の近い者同士の議論を通じた新しい事業のアイデア等、浜松における創造都市の展開の芽と呼べるものが見られる。

また、浜松創造カフェで特徴的なのは静岡文化芸術大学を中心として開催されるために、研究者や大学の活動に興味のある者が大学に来る機会の提供と、大学内での活動を外部に発信するという、研究機関を中心とした双方向の発信・交流の場となっていることだ。また、静岡文化芸術大学の学生がカフェの運営に関わるボランティアスタッフとして来場者との交流を通じ、自らの研究分野に対する学識

を深め、学生と専門家、研究者のコネクション作りが行われていることも興味深い。

一般に、コンサートのアフタートークや展覧会のギャラリートークの多くは、鑑賞者へのサービスとして行なわれることが多いであろう。しかし、「浜松創造カフェ」でこれらの活動が行なわれるのは、鑑賞者へのサービスではない。「買ってきて消費する」文化事業ではなく、浜松という都市の中で企画・制作することの魅力を知ってもらうことで、浜松に音楽イベントの制作をはじめとした文化産業が存在することの意義や必要性を理解する市民を1人でも増やしていくことを期待して行なわれているものである。こうした機会が文化創造の供給側への関心と非営利及び営利のビジネス化に向けての刺激を与えることになることを期待している。

4. クリエイティブ産業確振興に向けた展望

静岡文化芸術大学の音楽史研究と楽器博物館が連携して数年前より実施してきている古楽器を用いた室内楽のコンサートは、浜松市内だけでなく、東京や名古屋のメジャーなホールでも開催されるとともに、録音されたCDはドイツをはじめとした国外でも高い評価を得ている。音楽の発展は、楽器の発達とともにあったというのが音楽史研究が教えるところであるが、楽器産業の蓄積と芸術学研究が結びつくことで、浜松発の国際競争力のあるコンテンツを創造することが可能であることが、少なくとも大学の研究室レベルでは実証されつつある。今後はこうした成果を、アートマネジメントや文化政策分野の研究・教育と連携しつつ、非営利あるいは営利のビジネスとして産業化できるかどうか課題となってくる。楽器の発達と新しい音楽の創造という点では、楽器博物館の古楽器だけでなく、電子楽器をはじめとした、世界の最先端に行く浜松の楽器産業の技術に目を向けることがさらに重要である。こうした技術は、ジャンルを問わず、新たな音楽を生み出す上での重要なリソースとなる。しかしながら、これまでの浜松市には、こうした最先端の技術はあっても、市内には音楽のソフトを創造できる「音楽産業」が存在しなかった。ボーカロイドを開発したヤマハはあっても、初音ミクをブレイクさせたクリプトン・フューチャー・メディア社(本社：札幌市)はなかったのである。しかし、大学のデザイン学部にはコンピュータ・ミュージックを含むメディアアートを研究・教育する学科がある(メディア造形学科)。大学の持つリソースと楽器産業、そして、創造拠点に集まる様々な創造的人材との協働があれば、楽器だけでなく、浜松市内においてオリジナルな音楽、さらには映像等も付加されたメディアアートの作品が生み出されることも期待される。

最後に、浜松市には、楽器産業の蓄積と大学というリソースに加え、重要な人的資源がある。浜松市文化振興財団が運営する浜松市アクトシティ音楽院が2001年度から実施している「主催者養成セミナー」は他の自治体にはみられないユニークな講座である。毎年大学生から定年退職者まで様々な年齢・職業の市民約15名が1年間かけて受講し、最後に成果として実際にコンサートを企画・運営するという講座である。すでに9期にわたる修了生を送り出し、2010年度は10期生が学んでいるところである。修了生は百数十名に達し、その中には、まだまだ少数

ではあるが、企画会社を設立したり、NPO法人を設立したりして、浜松発のオリジナルのコンサート等の企画運営に取り組む市民が生まれつつある。現在は、ボランティアとして取り組んでいる市民が大半であるが、これらがプロ化していけば、音楽をはじめとした文化産業が浜松に根をおろすことも夢ではない。大学のアートマネジメントや文化政策の研究・教育機能及び、創造都市・浜松を実現するための中間支援機能を担うことを使命とする浜松創造都市協議会の活動をどのように結び付けていけるかが課題となろう。浜松創造都市協議会では、「メイド・イン・クリエイティブ浜松」という事業の準備を進めている。大学の研究と楽器博物館という地域資源が結びつくことから生まれる学術的意義の高い文化事業や、主催者養成セミナーによって育った市民によるオリジナリティの高い文化事業を、「メイド・イン・クリエイティブ浜松」つまり、「創造都市浜松製」というブランドをつけて発信していこうという事業である。モノづくりの分野で、優れた製品を世界中に発信することで発展してきた浜松市が、今度は、文化的コンテンツを産業として生産し、輸出していこうというビジョンである。

楽器産業の世界的集積にくわえ、大学が持つ芸術、デザイン、アートマネジメント及び文化政策分野の研究・教育機能、そして、オリジナルな文化創造の担い手を目指す市民の力が合わさることで、プロの芸術団体の確立や、オリジナルな企画を発信できるマネジメント会社の設立等が可能になるかもしれない。そうすれば、これまでのような「買ってきて消費するだけ」ではない、持続的な文化創造が行なわれるようになろう。

もちろん、これらは一朝一夕で成し遂げられるようなことではないが、明確なビジョンを描き、それに向けた人づくりとネットワークづくりをしていくことで、創造都市浜松に向けた取り組みが徐々に孵化していくよう、地道な基盤整備を行なっていくことが何よりも重要であろう。

参考文献：

浜松市『浜松市文化振興ビジョン』平成21年3月
Florida, Richard, *The Rise of the Creative Class, Basic Books*, 2002 (井口典夫訳『クリエイティブ資本論』ダイヤモンド社)

